

【特別展「対幅」によせて】

対幅の表現—連続性と完結性—

今回の展覧会名の対幅は、複数の画幅が対を成している作品という意味で使っています。試みに対幅を広辞苑を引くと、「一對になっている書画の幅。双幅。対軸。」とあり、双幅は、「二つが一對になっている掛幅。対幅。」と書かれています。広辞苑に限らず一般的には、対幅すなわち双幅（二幅対）を指し、三幅以上の画幅が対になったものも含めるときは、連幅と呼ぶ場合が多いのです。この展覧会の対象は、双幅だけでなく、三幅対、四幅対も入りますから、連幅とする方が良いでしょう。

しかし、いずれの用語を用いたところで、言葉として一般社会に定着しておらず、例えば連幅は広辞苑にはなく、諸橋の大漢和辞典にあたっては対幅、連幅、対軸、対幅いずれも項目としてありません。そこで、ここでは各々の画幅が一幅でも鑑賞できる独立性を持ち、それが対となって完備した絵画となる点に注目して、対幅という語を用いることにしました。

対幅の絵は、一見したところ、ふつう表具の形式も構図の上でも単独幅の絵と変わりません。特殊なものとして通景ないし通屏と呼ばれるものがありますが、それは縦長の掛幅を連ねて屏風絵のような一つの大画面を成したもので、全体の左右両端部のみを表具の柱と軸頭をつけています。

こうした通景のような特別なものを除いた通常の対幅作品は一幅でも使えますし、四幅を二幅づつに分けて掛けても違和感を感じることはないでしょう。このため本来は一對として制作された作品が散りぢりになり、対幅の体をなさなくなることも多く、琴棋書画図や四季山水図のような四幅対が二組の双幅として分蔵される場合もあり、今回の出陳品でも呂文英筆

四季禿貨郎図や謝天游筆四季青緑山水図などは、現在二箇所に分かれて所蔵されています。また展示の際に、対幅が持つ各幅の独立性を生かして、四季花鳥図を春夏秋冬のそれぞれに一幅づつ掛けるなどということも珍しくありません。さて、対幅画の特徴を今回の出陳品を例にとり見てみましょう。挿図は、数少ない宋代四季山水図四幅対の遺品として知られ、現在はそのうち三幅が、金地院（秋・冬景、全期間展示）と久遠寺（夏景、半期展示）に分蔵される国宝の夏秋冬山水図と、南宋末元初の画家顔輝筆の蝦蟇鉄拐図双幅（重要文化財、10月29日まで展示）です。

まず、対幅画の隣り合った図は基本的に左右反転した構図をとり、各幅の地面の高さや人物の位置はあまり大きく上下しないのが原則です。人物の大きさや景観の広がりや視点からの距離も、一對の図の中ではほぼ同一です。そして各図の景観は、実際には空間的にも時間的にも連続しない別個のものであるにもかかわらず、構図の上では平面的な連続性をもち、隣り合う画幅間で断絶感を観者に与えないような配慮がなされています。特に注意すべきは、人物の置かれた地面および土坡の輪郭線で、各図の間で連続感が得られるように巧みに処理されていることが、蝦蟇鉄拐図や前者の秋と冬の図で見られるのです。

前者の山水図は、各幅とも高士が一人で深山幽谷に遊ぶ様を描き、姿勢は様々であるにも関わらず、その視線はいずれも左奥に向かっていきます。夏は激しい風雨が谷間を襲っていることが松の枝の動きによって明示され、秋は一転して明るくどかな景色で、白い雲が浮かぶ明るい空には双鶴が舞い、高士がもたれる木は、松柏という

語句があるように松としばしば併称される柏です。冬は、雪が積もる暗い谷間に突き出た木の幹に猿が二匹現れ声をあげたため、高士が振り向いた一瞬を描き、竹が主要な樹木として中央に配されています。構図はいずれも辺角構図を基本としており、三幅の中でもより密接な関係にある秋景図と冬景図は対幅の原則通り、接する側にはあまり景物を充填せず、外側に岩や樹木を配置することによって安定感を生みだしています。この三幅は対幅として非常に構図と描法が整い、調和の取れた、まったく隙のない完成された作品で、南宋画院の相当な名手によって描かれたと推定されています。失われた春景図を、現存三幅から想像してみますと、春の象徴である梅か桃の木と高士一人が秋景図のような静的な構図で描かれていたのでしょうか。三幅には花が見られませんが、あるいは芽ぶいたばかりの柳が配されていたかもしれません。いずれにせよ本来は四季四幅が詩の起承転結の四句のように変化に富んだ連続性と完結性を示していたに違いありません。

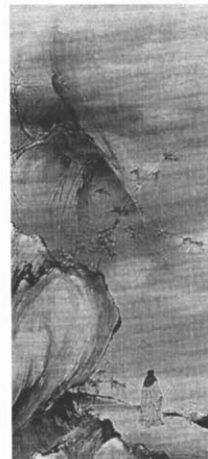
鉄の杖を携えた鉄拐仙と巨大な蝦蟇を肩に載せた蝦蟇仙人の二幅を対とした蝦蟇鉄拐図は、どちら

も山中の岩に坐して術を行なう仙人を描きます。そして鉄拐仙人は自分の魂魄を口から吐き、同じように蝦蟇仙人上方の補絹部分には本来、蝦蟇の口から霊気が立ち上っていたのです。仙人の姿は右幅が左後から、左幅が反対方向の右前から写され、左右幅の人物は向い合せの位置になるように構成されています。季節の割り振りはこの双幅では認められず、蝦蟇仙人が左手に持つ桃も花と実を同時に付け、自然を超越した仙界を明示しています。この二仙人を一對に描く根拠は明らかになっていませんが、その霊気の描写が両者に共通し、対幅表現の上から好んで対の絵として制作されたのではないかと筆者は考えています。

この二例に見られるように、各幅の間の連続性・共通性ととも、対比の面白さや全体の完結性が対幅画の見どころといえます。

また対幅画は複数の画幅を連ねるという性格上、必然的に鑑賞に広い空間を要求し、部屋飾りとして機能する場合も多く、その装飾性にも注意を払わなければなりません。さらに画卷、画冊、屏風絵などの他の画面形式とのかかわりを考えるためにそうした関連作品も展示いたします。（藤田伸也）

●冬景図 金地院蔵



●秋景図 金地院蔵



●夏景図 久遠寺蔵

